

図1 各学会・各専門医制度の関係とデータベースの構造

検討も始めていた。これらの目的を達成するために、委員会は外科系の統一されたデータベースの構築を具現化することを決定し、日本外科学会情報広報委員会を中心とした手術症例データベースワーキンググループを立ち上げることにした。

その頃すでに心臓血管外科専門医認定機構は、認定施設を中心として症例ごとの risk-adjust された極めて詳細な臨床情報を集計したデータベースを稼働させており、その結果の分析・評価により、①心臓血管外科手術実施状況とその結果の把握、②疾患領域別の医療水準評価、③より良質な医療を市民に提供するための臨床情報のフィードバック、④正確かつ迅速な臨床研究支援のための基盤整備、などを継続して行っていた¹⁾。また、日本消化器外科学会は、関連する7学会・研究会とともに、がん登録事業と連携可能なデータベースの構築を行うため、2009年度より制度設計・登録フォーマットの共通化などの作業を開始していた²⁾。この両学会の指導の下に、手術症例データベースワーキンググループは設置され（法人化後に発展的に解消した）、その事業を臨床研究として捉えることで厚生労働省科学研究費補助金（特別研究事業）を申請した。

またその少し前、2008年初頭より委員会（第37回委員会総会）は、外科専門医と各サブスペシャリティ学会の専門医申請資格、更新資格の統一・共通化をめざした検討を開始していた。サブスペシャリティ学会の専門医が外科専門医を有していること、それぞれの専門医資格の申請・更新には各学会の指定する手術実績を提出すること、の二点を満たす場合には、サブス

ペシャルティ学会の専門医を更新する際に外科専門医を同時に無条件で更新できるようにする「外科専門医制度の枠組みの変更」を並行して審議しつつあった。

この専門医制度の変革を実行に移すためには、各サブスペシャリティ学会と日本外科学会間の各会員情報の共有、施設番号の共有、手術実績としての症例登録データの共有、入力フォーマットの共通化などの作業が不可欠となる。そのため、この専門医申請・更新に使用する手術実績情報として、この手術症例データベースに登録される症例のみを使用することとし、手術症例データベース入力率を向上させることとした。

これにより外科専門医や各領域の専門医を申請あるいは維持したい日本外科学会会員は、手術を実施するごとに症例入力を義務づけられることになるが、その一方で、同一症例の複数回の様々な臨床情報登録を、一度の単一人による入力ですませることが可能になるような入力フォーマットをデザインすることで、会員に利便性を提供できると判断した。関連する各学会・各専門医制度の関係を図1に示す。サブスペシャリティ学会は、日本外科学会を基盤とした2階建て部分を構築するが、日本消化器外科学会には、さらに関連する7学会・研究会による3階建て部分をさらに包含する形態をとることになった。また専門医制度上、外科専門医を完全な1階部分とするサブスペシャリティ専門医は4専門医制度（消化器外科専門医、心臓血管外科専門医、呼吸器外科専門医、小児外科専門医）のみであるが、領域横断的に外科専門医制度と深く関わる複数の専門医制度（内分泌・甲状腺外科専門医、乳腺専

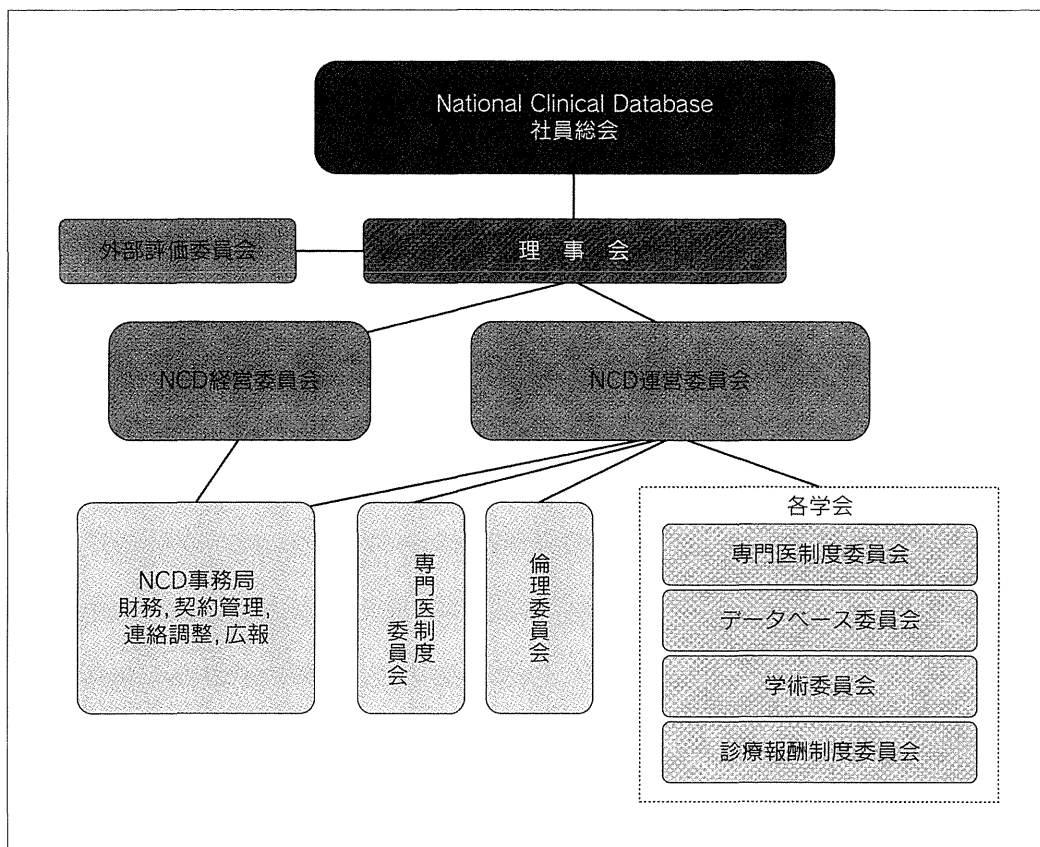


図2 National Clinical Database の組織
(NCD ホームページ：文献3 より引用して一部改変)

門医など) の登録も可能とした。

NCD の組織

このデータベースは日本外科学会ならびに関連するサブスペシャルティ9学会で構築される。この大規模臨床データベースを設計・運営していくためには委員会レベルの組織では不可能であり、多額の経費も必要とした。それゆえ、日本外科学会、日本消化器外科学会が基盤経費を負担すべく基金を提供し、さらに厚生労働省科学研究費補助金(がん臨床研究事業：主任研究者 後藤満一、および特別研究事業：主任研究者 岩中督)を加え、この事業を実施するための一般社団法人 National Clinical Database を2010年4月に立ち上げるようになった。図2に、この法人の組織図を示す。社員にはこのデータベースの構築・運営に関わる10学会が参加し、実際のデータベースの運営を担当する運営委員会、法人の経営に携わる経営委員会を軸に、外部評価者会議の監修を加えて活動を開始した^{3,4)}。

データベースの構造

データベースの詳細は、各領域担当者の執筆に譲り、NCDの理念を実現するための基盤部分のみ述べる。NCDに求められているものは、①どのような手術が、誰によって、どの地域で、どの程度の数が行われているか、などの外科関連の専門医制度のあり方を考えるための共通基盤を構築すること、②各施設や外科医の医療水準を、全国平均と比較検討することのできる分析結果の提示、ならびに個々の医療品質の向上に向けた取り組みを支援すること、③その結果、患者や市民に最善の医療を提供し、かつその体制整備に向けた様々な政策を提言すること、④外科関連の専門医制度が合同でデータベースを構築し、領域の垣根を越えた学会間の連携を進めること、などである。

上記の目的を達成するために設計したデータベースは、①手術時に登録可能な統計的調査⁵⁾、②各領域の医療水準を評価する術前・術中・術後項目より構成される医療評価調査、③臨床研究に向けたプロジェクト別の追加調査、の3階建て構造とした(図1)。領域によって調査項目は異なり、心臓血管外科領域では200

項目を超える^{6,7)}。

おわりに

NCD 設立の経緯、その組織とデータベースの構造の概要を述べることで、NCD の理念の一端を説明した。このデータベースは学術団体が外科医情報も含めて外科手術の全数把握に努めるといふ、世界中に例を見ないデータベースである。アカデミアが責任を持って発信するデータベースであり、この分析結果は様々な臨床研究、診療、政策などに影響を与える。最終的には市民に適正・適切な外科医療を提供することが目的であり、マスメディアや行政からの注目度も高い⁸⁾。2011 年 1 月の手術症例より NCD への登録が始まったが、初年度よりすでにその登録数は 100 万件を超えている。日本外科学会会員諸氏の協力により、手術症例登録がますます改良され発展することを期待したい。

文献

- 1) Miyata H, Motomura N, Kondo MJ, et al : Toward quality improvement of cardiovascular surgery in Japan : an estimation of regionalization effects from a nationwide survey. Health Policy **91** : 246-251, 2009
- 2) 後藤満一, 杉原健一, 鈴木弘行 : 消化器外科データベースの構築に向けて. 外科治療 **102** : 321-331, 2010
- 3) National Clinical Database ホームページ : http://www.ncd.or.jp/articles/article_2_1.pdf
- 4) 岩中 督, 宮田裕章 : National Clinical Database 構築に向けて. 日外会誌 **111** : 306-310, 2010
- 5) National Clinical Database ホームページ : http://www.ncd.or.jp/articles/article_2_2_1.pdf
- 6) National Clinical Database ホームページ : http://www.ncd.or.jp/articles/article_2_2_2.pdf
- 7) 岩中 督, 宮田裕章, 兼松隆之 : 手術症例データベースの構築. Surgery Frontier **17** : 39-43, 2010
- 8) 岩中 督, 宮田裕章, 大久保 豪 : 多施設共同大規模データベースの意義. 日本臨床 **69** (増刊) : 625-630, 2011

IWANAKA Tadashi, et al

東京大学大学院医学系研究科小児外科

〒113-8655 東京都文京区本郷 7-3-1

原稿募集

私の工夫-手術・処置・手順

弊誌では「私の工夫-手術・処置・手順」欄への読者の皆様からの投稿を募集しております。

日ごろ実践しておられます手術・処置・手順などに関する工夫を右記の要領でおまとめのうえ、ご寄稿ください。

投稿受付先 : 〒113-8719

東京都文京区本郷局私書箱 5 号

(株)医学書院「臨床外科」編集室宛

- 1) 原稿の内容は、日ごろ実践しておられる手術、処置、検査などに関する独自の工夫点をご紹介いただくものとします。
- 2) 原稿枚数は 400 字 4 枚程度とします。レイアウトの関係で、多少変更させていただくことがあります。ほか、図表がある場合は 1~2 枚。
- 3) 原稿には住所、氏名、E-mail アドレスを明記してください。
- 4) 著作権譲渡同意書ならびに文章データを保存した CD、FD などを同封してください。
- 5) 原稿の採否は、編集委員会で決定させていただきます。

NCD の現状

診療科の登録状況と入力体制

National Clinical Database (NCD) in Japan : department registration and data entry

東京大学大学院医学系研究科医療品質評価学講座¹ 一般社団法人 National Clinical Database²

大久保 豪¹ 宮田裕章^{1,2} 橋本英樹² 後藤満一²

村上 新² 本村 昇² 岩中 督²

【ポイント】

- ◆ 2012年4月現在、NCDにはおよそ3,400の施設から4,900余りの診療科が登録されている。
- ◆ 2011年の症例としては、100万症例以上が集積される見込みである。
- ◆ システムのユーザビリティの向上を継続的に図るとともに、医療の質の向上に継続的に貢献できるような体制作りが重要である。

臨外 67(6):746~751, 2012

はじめに

医療に携わる専門家は、患者の価値を重視しながら、「医療の質」を継続的に向上させること、そしてそのために必要な体制を構築することが求められる¹⁾。「医療の質」の継続的な向上のためには、「医療の質」を定義し、系統的に把握することが必要であり、医療の提供体制や患者のリスクを調整したうえでの治療成績など、臨床現場に即した多角的な指標を算出することが有益である。さらに、算出された指標を臨床現場が活用し、質の向上に役立てることができる体制を整備することが求められる^{2,3)}。こうした臨床現場に即した指標の算出、算出された指標の臨床現場での活用を可能にするため、外科関連専門医制度委員会は加盟学会の了解のもとで、2010年4月に一般社団法人 National Clinical Database(NCD)を立ち上げた^{4~8)}。2010年中は、データベース事業の正当性について検討を行う^{9,10)}とともに、診療科および入力担当者の登録を開始した。2011年1月1日には、症例の登録が開始された。本稿では、2012年4月5日現在の診療科の登録状況、2012年1月13日現在の各診療科の登録対象症例数、および入力体制について報告する。

診療科の登録状況

■診療科の登録方法

NCDにおける症例登録の単位は診療科である。登録された症例はNCDのシステム上で設定された診療科内でのみ入力、編集することができる。同じ施設であっても、他科の診療科の症例を入力、編集するためには当該診療科の入力担当者としての権限を得る必要がある。

診療科の登録は、その診療科の症例登録について責任をもつ「診療科長」が実施することとした。診療科の区分については、各施設に一任した。第三者によるなりすましを防ぐため、診療科長に対して、身分証の提示を求めた。登録は2010年10月より開始し、随時申請を受け付けている。

■診療科の登録状況 (2012年4月5日現在)

3,372の施設から4,916の診療科が登録されており、毎週数万症例が登録されていた。地方別の参加施設・診療科数を表1に示した。2008年の医療施設調査によると、全身麻酔での手術を実施している施設は一般病院7,714施設中3,652施設、一般診療所99,083施設中

867施設であった¹¹⁾。また、2011年3月1日現在、日本外科学会の外科専門医修練施設は1,267施設、関連施設は886施設である¹²⁾。医療施設調査の調査単位とNCDに登録されている施設の単位は完全に一致するものではなく、調査年度も異なるため、完全な比較は困難である。しかし、日本国内で外科手術を行っている施設のうち、非常に広範な施設から協力を得られており、データベース事業として、一定の有用性、正当性を確保することができたと考えられる。

各診療科の登録対象症例数

■調査方法

NCDの構築したシステム上に、ウェブアンケートページを作成して、各診療科に回答を依頼した。NCDに登録された入力担当者であれば、回答を入力することが可能とした。ただし、回答の正確性を担保するため、診療科の責任者（診療科長）、もしくは責任者が認めた医師（NCD主任外科医）に回答内容の確認および承認（確定作業）を行うよう依頼した。

調査は2011年5月から実施した。本稿では、2012年1月13日時点の回答内容について報告する。2012年1月13日時点でNCDに登録されていた診療科は4,089か所であり、回答内容が確定された診療科は2,123か所（51.9%）であった。

NCDの入力対象症例に関して、2010年の年間症例数を尋ねた。尋ねたのは、外科専門医、消化器外科専門医、肝胆膵外科高度技能専門医、小児外科専門医、内分泌・甲状腺外科専門医、乳腺専門医、心臓血管外科専門医（血管外科部門）、心臓血管外科専門医（成人心臓血管外科部門）、心臓血管外科専門医（小児先天性心臓外科部門）、に該当する手術症例数（手術日が2010年1月1日～2010年12月31日）と、小児外科の新生児非手術症例、肝胆膵外科高度技能専門医のセカンドオピニオン症例、乳腺専門医の診断・治療のみの症例である。回答は整数で依頼し、該当する症例がない場合は「0」を記載するよう依頼した。

なお、回答状況について地域的な偏りがないかどうか、都道府県単位で回答率を確認した。回答率の範囲は36.6%～67.6%で中央値は51.7%、25パーセンタイルは47.1%、75パーセンタイルは56.1%であった。

■調査結果

2010年における各診療科の登録対象症例数を表2、

表1 地方別の参加施設数（2012年4月5日現在）

	施設数	
	n	%
北海道・東北	437	13.0%
関東	942	27.9%
中部	495	14.7%
近畿	650	19.3%
中国	252	7.5%
四国	142	4.2%
九州・沖縄	454	13.5%
全体	3,372	

3に示した。1診療科あたりの外科専門医症例数は平均286症例であった。2011年の症例としては、100万症例以上が集積される見込みである。

診療科の入力体制

■調査方法

各診療科の登録対象症例数について調査したアンケートページにて、入力時期、入力方法、入力担当者、入力場所を尋ねた。

入力時期については、「できるかぎりリアルタイムに症例情報を登録している（例：手術実施時に術前・術中情報を入力し、退院時に退院時情報を入力する）」「入力情報が確定した後に、症例情報を登録している（例：患者が退院し、術後30日が経過した後に症例登録を始める）」「症例情報を集積し、一定期間ごとにまとめて入力している」から択一で選択を依頼した。「一定期間ごとにまとめて入力」を選択した場合は、その期間について、「1週間未満」「1週間以上1か月未満」「1か月以上3か月未満」「3か月以上6か月未満」「6か月以上」で尋ねた。

入力方法については、「電子カルテをはじめとした診療科情報システムをNCD対応に修正し、入力を行っている」「各分野のCRF（Case Report Form：入力マニュアルなど）を用いて、いったん紙に入力した後にデータ登録を行っている」「FileMakerやMicrosoft Accessなど、診療科独自のデータベースにいったんデータを集積し、入力を行っている」「原資料となる診療情報を参照しながら、直接web経由でデータ登録を行っている」「その他」の中から複数選択で尋ねた。「その他」を選択した場合は、自由入力での入力方法の記載を求めた。

表 2 2010 年の症例数（症例数が 0 の診療科を含む）

	診療科数	パーセンタイル			平均	標準偏差
		25	50	75		
外科専門医手術症例数	2,261	50	181	390	286.1	367.8
消化器外科専門医手術症例数	2,256	0	26	253	163.6	294.3
肝胆膵外科高度技能専門医手術症例数	2,261	0	0	5	9.6	26.7
小児外科専門医手術症例数	2,266	0	0	0	18.5	78.4
内分泌・甲状腺外科専門医手術症例数	2,263	0	0	0	6.7	65.8
乳腺専門医手術症例数	2,267	0	0	24	26.4	64.0
血管外科手術症例数	2,267	0	0	5	24.3	64.7
成人心臓血管外科手術症例数	2,273	0	0	0	19.5	60.0
小児先天性心臓外科手術症例数	2,264	0	0	0	3.3	22.3
肝胆膵外科セカンドオピニオン症例数	2,263	0	0	0	1.3	5.7
小児外科非手術症例数	2,265	0	0	0	0.6	7.0
乳腺専門医非手術症例数	2,263	0	0	4	19.9	155.2

表 3 2010 年の症例数（症例数が 1 以上の診療科のみの集計）

	診療科数	パーセンタイル			平均	標準偏差
		25	50	75		
外科専門医手術症例数	1,911	107	230	448	338.5	377.3
消化器外科専門医手術症例数	1,217	103	236	420	303.3	343.9
肝胆膵外科高度技能専門医手術症例数	745	6	15	34.5	29.2	40.0
小児外科専門医手術症例数	427	6	24	131	97.9	157.7
内分泌・甲状腺外科専門医手術症例数	524	3	7	20	29.1	134.5
乳腺専門医手術症例数	942	10	35	83	63.6	86.6
血管外科手術症例数	644	21	59.5	110	85.4	97.4
成人心臓血管外科手術症例数	457	37	71	122	97.0	101.9
小児先天性心臓外科手術症例数	135	3	29	88	56.0	73.9
肝胆膵外科セカンドオピニオン症例数	389	2	4	10	7.6	11.9
小児外科非手術症例数	118	2	6	12	12.1	28.3
乳腺専門医非手術症例数	737	5	10	22	61.2	267.4

入力担当者については、「診療科長」「診療科所属の医師（診療科長以外）」「診療科に関わる研修医」「他科所属の医師」「看護師」「診療情報管理士」「医師事務作業補助者」「その他」から複数選択で尋ねた。「その他」を選択した場合は、自由入力で入力担当者の記載を求めた。

入力場所については、「手術室の診療端末」「手術室以外の診療端末」「院内の診療端末以外の共有端末」「個人用 PC」「その他」の中から複数選択で尋ねた。「その他」を選択した場合は、自由入力で入力場所の記載を求めた。

■調査結果

1. 入力方法

各診療科の入力方法を表 4 に示した。最も多いのは、「原資料となる診療情報を参照しながら、直接 web 経由でデータ登録を行う」という方法で、1,344 診療科（63.3%）であった。また、8.2%の診療科が、診療科情報システムを NCD 対応に修正し、入力を行っている」と回答した。「その他」と回答した診療科からは、「電子カルテを参照しながら、入力している」「電子カルテなどの原資料から登録用ファイルを作成して入力する」といった《病院情報システムとの連携》、「診療情報管理士が入力し、定期的に医師に確認を依頼する機

表4 入力方法 (複数回答, n=2,123)

	n	%
原資料となる診療情報を参照しながら, 直接 web 経由でデータ登録を行う	1,344	63.3%
ファイルメーカやアクセスなど, 診療科独自のデータベースにいったんデータを集積し, 入力を行っている	458	21.6%
各分野の CRF (case report form: 入力マニュアルなど) を用いて, いったん紙に入力した後にデータ登録を行っている	438	20.6%
電子カルテをはじめとした診療科情報システムを NCD 対応に修正し, 入力を行っている	175	8.2%
その他	37	1.7%

表5 入力時期 (n=2,123)

	n	%
できるかぎりリアルタイムに症例情報を登録している	503	23.7%
入力情報が確定した後に, 症例情報を登録している	598	28.2%
症例情報を集積し, 一定期間ごとにまとめて入力している	1,022	48.1%

会を設けている」といった《登録情報確認のための体制構築》が挙げられていた。《病院情報システムとの連携》に関しては、連携のためにかかるコストが問題となっていることも指摘された。

今後は, Nielsen の挙げた学習しやすさ (Learnability), 効率性 (Efficiency), 記憶しやすさ (Memorability), エラー発生率 (Errors), 主観的満足度 (Satisfaction) という5つの特性¹³⁾からシステムのユーザビリティを継続的に改良していく必要がある。ユーザビリティ向上により, 入力者の負担が軽減され, データの正確性が向上することが期待できる。また, 入力のためのスタッフが限られている中小規模の施設でも参加することができるようになり, 導入障壁の低下・円滑な普及^{14,15)}につながり, 有用性および正当性の向上も期待できる。

一方で, NCD のシステムに合わせて診療科情報システムを修正したという診療科も一定割合存在することが明らかになった。NCD の登録項目の改訂は, こうした診療科のシステムに影響を与える可能性が高い。しかし, 標準的な治療方法の変化や新たな治療方法の開発といった医療そのものの変化に応じて, 登録項目の改訂は避けられない。したがって, 登録項目の改訂を行う場合は, 必要性や実施の間隔を十分に吟味するとともに, できるだけ早期に改訂を周知するといった対応が肝要になると考えられた。

表6 症例情報を集積して入力するまでの期間 (n=1,022)

	n	%
1週間未満	16	1.6%
1週間以上1か月未満	162	15.9%
1か月以上3か月未満	408	39.9%
3か月以上6か月未満	289	28.3%
6か月以上	147	14.4%

2. 入力時期

各診療科の入力時期に関する回答を表5に示した。できるだけリアルタイムに入力している, もしくは入力情報が確定した後に入力しているという診療科が全体の半数以上を占めていた。こうした診療科では, 症例情報の発生から入力までの期間が短いため, 治療, 手術の情報に関して, 比較的正確に入力を行うことが可能であると考えられる。ただし, 登録後に治療内容が変更された場合や合併症が発生した場合に, 漏れなく登録を行えるような工夫が必要になると考えられる。

一方で, 「症例情報を集積し, 一定期間ごとにまとめて入力している」という診療科は, 1,022か所(48%)であった。この診療科が, 症例情報を集積してから入力するまでの期間に関する回答を表6に示した。入力までの期間が長くなるほど, データの正確性が低下することが懸念されるため, 情報を集積する方法の工夫や, 入力したデータの確認の徹底といった工夫が必要

表7 入力場所（複数回答，n=2,123）

	n	%
院内の診療端末以外の共有端末	1,156	54.5%
個人用 PC	1,081	50.9%
手術室以外の診療端末	325	15.3%
手術室の診療端末	65	3.1%
その他	50	2.4%

になると考えられる。ただし、診療科によって登録する情報が確定するまでの期間や、登録する情報の収集経路が異なるため、適切な入力方法および入力までの期間については十分に検討する必要がある。

3. 入力場所

入力を行う場所に関する回答を表7に示した。「院内の診療端末以外の共有端末」から入力している診療科が最も多く1,156か所（54.5%）であった。「その他」と回答した診療科からは、「診療科が所有している端末」や「診療情報管理室の端末」といった「院内の診療端末以外の共有端末」に該当する回答が挙げられた。

4. 入力担当者

入力担当者に関する回答を表8に示した。最も多いのは、「診療科所属の医師（診療科長以外）」が入力を行っている診療科で1,232か所（58.0%）であった。また、「診療科長」が入力を行っている診療科も1,125か所（53.0%）であった。医師自らが入力を行うことで、情報の正確性が向上することが期待できるが、医師の業務負担を増大させている可能性もある。今後は、入力にかかる時間など、入力にかかる負担に関する調査なども行っていく必要がある。

また、「その他」と回答した診療科に自由記述で回答を求めたところ、臨床工学技士や臨床検査技師といった医療関連専門職、秘書や事務員といった事務専門職が挙げられた。事務専門職に該当すると思われる職種が回答されていたのは41か所であった。診療情報管理士、医師事務作業補助者、「その他」で事務専門職と回答した診療科を合計すると、1,013か所（43.3%）となった。NCDの項目の中には、原資料を参照しながら、医療事務専門職が入力可能な項目も多く含まれている。したがって、こうした入力方法そのものは問題ではない。一方で、医師でなければ判断の難しい項目も存在するため、医療事務専門職が入力を行っている診療科

表8 入力担当者（複数回答，n=2,123）

	n	%
診療科長	1,125	53.0%
診療科所属の医師（診療科長以外）	1,232	58.0%
診療科に関わる研修医	113	5.3%
他科所属の医師	7	0.3%
看護師	13	0.6%
診療情報管理士	216	10.2%
医師事務作業補助者	745	35.1%
その他	60	2.8%

では、医師による確認の手順や頻度が重要となる。NCDの事業の有用性を高めていくうえでは、これらの診療科における確認の手続きについて、現地調査などを行い、その情報を適切な形で共有することが有益であると考えられた。

おわりに

2012年4月現在、およそ3,400の施設から4,900を超える診療科が登録されており、毎週数万症例が登録されていた。また、診療科に対する調査から、1診療科あたりの外科専門医症例数の平均は286症例であることが明らかになった。2011年の症例としては、100万症例以上が集積される見込みである。このようにNCDは非常に広範な施設から協力を得られており、データベース事業として、一定の有用性、正当性を確保することができたと考えられる。今後は、症例登録のユーザビリティの向上を継続的に図るとともに、診療科の入力体制への影響を鑑みながら、登録項目の修正などを検討し、周知を行っていく必要がある。また、個々の診療科に対する聞き取り調査などを行い、各診療科で行っている工夫や入力者の負担を軽減させるために行っている工夫などを明らかにして、データベース事業全体の正確性を高め、医療の質の向上に継続的に貢献できるよう、体制作りにも努める必要がある。

文献

- 1) Institute of Medicine : Crossing the Quality Chasm : a New Health System for the 21st Century. Washington DC, National Academy Press, 2001
- 2) Porter ME, Teisberg EO : How physicians can change the future of health care. JAMA 297 : 1103-1111, 2007
- 3) Jamtvedt G, Young JM, Kristoffersen DT, et al : Audit and feedback : effects on professional practice and health care outcomes. Cochrane Database Syst Rev (2) : CD000259, 2006

- 4) 岩中 督, 宮田裕章, 兼松隆之: 手術症例データベースの構築. Surg Fronti 17: 357-361, 2010
- 5) 宮田裕章, 岩中 督, 後藤満一, 他: 専門医制度と連携した臨床データベース事業の社会的意義と課題. Surg Fronti 17: 362-368, 2010
- 6) 岩中 督, 宮田裕章: National Clinical Database 構築に向けて 全体構造. 日外会誌 111: 306-310, 2010
- 7) 後藤満一, 宮田裕章, 杉原健一: National Clinical Database 構築に向けて 実際の運営: 特に消化器外科関連事項について. 日外会誌 111: 373-378, 2010
- 8) 岩中 督, 宮田裕章, 大久保豪: 多施設共同大規模データベースの意義. 日本臨牀 69 (増刊3): 625-630, 2011
- 9) 一般社団法人National Clinical Database: 倫理的配慮. <http://www.ncd.or.jp/about/about5.html> (2012年3月アクセス可能)
- 10) 大久保豪, 宮田裕章, 友滝 愛, 他: 医療水準評価を目的とした大規模臨床データベースの正当性に関する研究. 医療と社会 21: 435-450, 2012
- 11) 厚生労働省: 平成 20 年 (2008) 医療施設 (静態・動態) 調査・病院報告の概況. <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/08/> (2012年4月11日アクセス可能)
- 12) 一般社団法人日本外科学会: 日本外科学会の概要. <http://www.jssoc.or.jp/aboutus/society/info.html> (2012年4月11日アクセス可能)
- 13) ニールセン J: 2章 ユーザビリティとは? ユーザビリティエンジニアリング原論: ユーザーのためのインタフェースデザイン. 東京電機大学出版局, 2002, pp19-38
- 14) Boonstra A, Broekhuis M: Barriers to the acceptance of electronic medical records by physicians from systematic review to taxonomy and interventions. BMC Health Serv Res 10: 231, 2010
- 15) Simon SR, Kaushal R, Cleary PD, et al: Correlates of electronic health record adoption in office practices: a statewide survey. J Am Med Inform Assoc 14: 110-117, 2007

OKUBO Suguru, et al

東京大学大学院医学系研究科医療品質評価学講座
〒113-8655 東京都文京区本郷 7-3-1

新しい角度から外科の最前線を捉える

SURGERY Vol.74 No.6 2012

《特集》

最新のヘルニア手術—アプローチから修復まで

臨床雑誌

6 外科

定価2,730円(本体2,600円+税5%)

I. 鼠径部ヘルニア

1. 鼠径部の局所解剖

(聖路加国際病院消化器一般外科) 柵瀬信太郎

2. 鼠径ヘルニア

1) McVay法

(亀田メディカルセンター一般外科) 三毛牧夫

2) 腹腔鏡下修復

(原三信病院外科) 江口 徹

3) メッシュを用いた修復

a) Lichtenstein法

(みやぎき外科・ヘルニアクリニック) 宮崎恭介

b) Mesh plug法

(信州大学外科学第一講座) 宮川眞一

c) Kugel法

(岡山医療センター消化器外科・一般外科) 内藤 稔

d) プロリンヘルニアシステム(PHS)法

(聖マリアンナ医科大学消化器・一般外科) 大坪毅人

3. 小児鼠径ヘルニア

(東京女子医科大学小児外科) 川島章子

4. 再発鼠径ヘルニア

(NTT東日本関東病院外科) 小西敏郎

5. 大腿ヘルニア

(金沢大学がん局所制御学) 中村慶史

II. 腹壁ヘルニア

腹壁癒痕ヘルニア

(岩手医科大学外科) 若林 剛

III. 骨盤部ヘルニア

閉鎖孔ヘルニア

(帝京大学外科) 稲葉 毅

ただいま前金年間購読受付中!

38,500円(税込・増刊号含む全13冊)

単体購入より割安となり,送料も弊社負担です

南江堂

〒113-8410 東京都文京区本郷三丁目 42-6 (営業) TEL 03-3811-7239 FAX 03-3811-7230

120418M

NCD の将来展望

Future perspective of NCD

福島県立医科大学医学部臓器再生外科学¹ 東京大学大学院医学系研究科医療品質評価学²
 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科腫瘍外科学³ 東京大学大学院医学系研究科小児外科学⁴
 東北大学大学院医学系研究科先進外科学⁵

後藤満一¹ 宮田裕章² 杉原健一³ 岩中 督⁴ 里見 進⁵

【ポイント】

- ◆ NCD のデータ登録の一元化により、手術実施施設が複数であっても、自らの経験症例数はインターネットで確認可能である。
- ◆ 入力 は 外科医 だけでなく、看護師、診療情報管理士、医師事務作業補助者、データマネージャーも可能である。
- ◆ 正確なデータを保証するため、主任外科医もしくは診療科長のデータチェックによる承認が必要である。
- ◆ 外科関連専門医申請、リスク調整した外科医療水準評価、労働環境の改善、適正な診療報酬の算定、臨床研究などに利用できる。

臨外 67(6) : 752~755, 2012

外科医は自分の手術症例数を知っているか？

日本外科学会の専門医の申請には 350 例の症例が、更新には過去 5 年間に 100 例以上の手術経験が必要となる。日本消化器外科学会専門医の申請では、450 例以上の診療経験が、更新においても外科学会と同様、過去 5 年間に 100 例の診療経験が必要となる。これまで、各申請者が自分の経験した症例のデータを自ら打ち込み、申請に使っている。同じ作業を手術に参加した外科医が別個に行う。外科の質を担保するのに、診療経験が重要な点は理解できるが、大変忙しい外科診療のなかで、なんと貴重な時間を学会は要求するのか。一方、修練施設での研修状況を把握し、医局員の研修ローテーションを組もうとすると、おのおのが術者として、あるいは助手としてどれだけの症例を経験したのか、本人に聞いても、施設に聞いても、データは即座に出てこない。データがなければ、評価ができないし、次の目標は設定できない。

わが国の外科医療の質は？

2004 年より臨床研修制度が変わった。その頃から外科離れが著しくなった。日本の外科医は疲れ果てて、まともな医療ができていないのだろうか？ 決してそうではない。2007 年に日本消化器外科学会で実施した手術調査によると、術後死亡率からみた周術期の成績は、世界的にみても素晴らしいことが明らかになっている (図 1)¹⁻⁵⁾。しかし、これを客観的に評価するには、リスク調整した外科医療の質 (risk-adjusted surgical outcome : RASO) が評価できるデータの取捨と解析が必要になる。例えば、歩いて来られる患者が多い医療施設と、救急車で搬送されてくる患者が多い医療施設では、同じ胃切除を行っても、死亡率と合併症の発生率は当然、異なるからだ。患者のリスクを調整した評価が行われなければ、両者は比較できない。このような観点から、日本消化器外科学会の消化器外科データベース委員会では、RASO 評価可能なデータベースの構築をめざし、平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 (がん臨床研究事業) に応募し、採択された⁶⁾。その後、日本外科学会の手術症例登録の動きと一体と

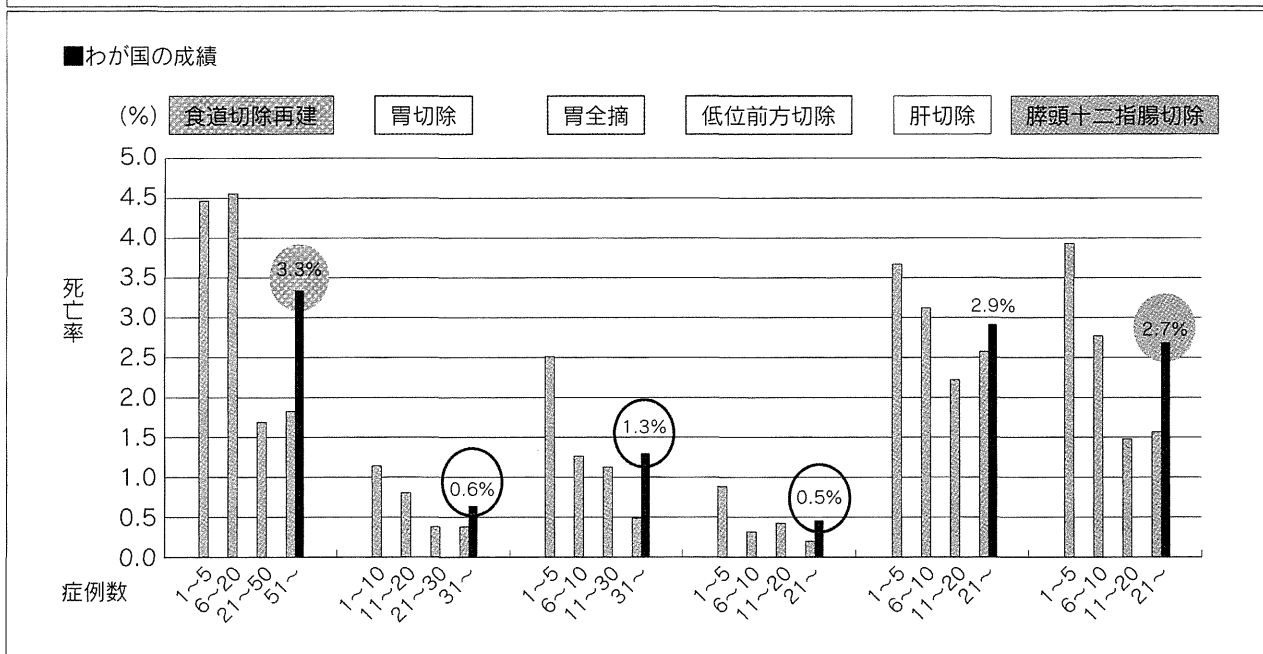
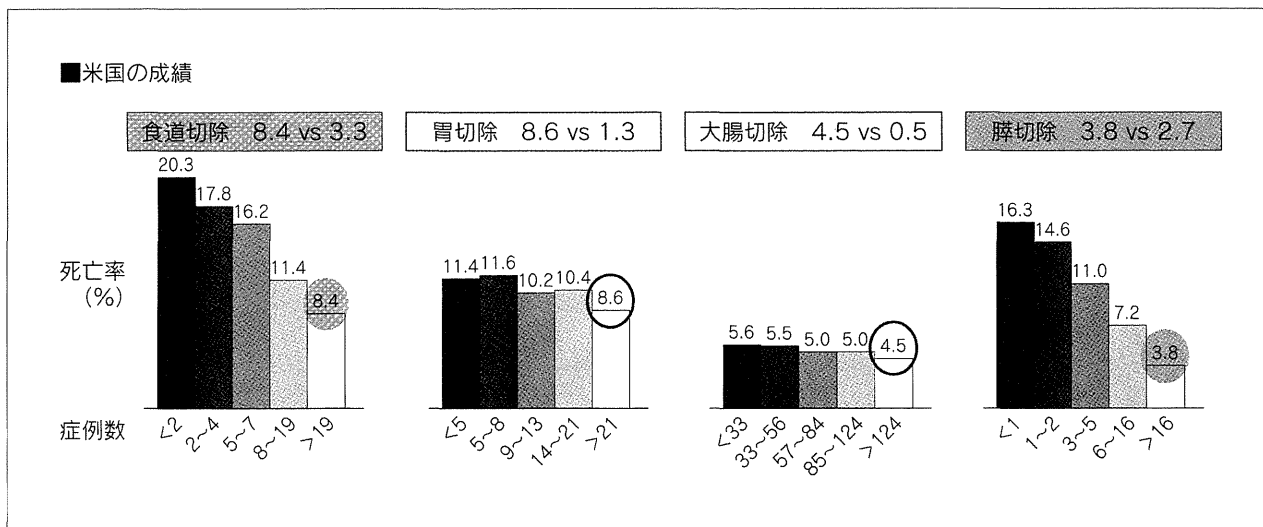


図1 わが国の消化器外科手術成績²⁾と米国の成績⁵⁾の比較 (症例数・カテゴリー別の死亡率)

各術式において、Hospital volume (1年間の手術症例数)の増加により、死亡率の低下がみられる。わが国の臓器別の手術死亡率の全国平均値は、米国の high volume center よりも良好なことがみてとれる。ただし、リスクを調整した比較ではないので、判断は慎重でなければならない。下図：赤色のグラフは死亡率平均を示す。(上図は文献5、下図は文献2をもとに作成)

なってNCDが創設された。2012年2月の時点で、登録症例は100万例を超えている。

ACS-NSQIP との連携

入力項目の定義はACS-NSQIP (American College of Surgeons-National Surgical Quality Improvement Program)と同じであるため、国際間比較が可能となっている。ACS-NSQIPの公開結果を照会すると、図2のようなになる⁷⁾。すなわち、ある術式に関して、リスク調整した全国の施設ごとの成績が順番に並ぶ。当

該施設のみ自分たちの位置が示されるが、1より有意に低いところは、死亡に対するリスクが低く、1より有意に高いところはリスクが高いことを示す。消化器外科では主たる8術式、つまり食道切除再建術〔食道再建術再建のみ(胃管再建)、食道再建術再建のみ(結腸再建)を含む〕、胃全摘術、胃切除術(幽門側)、結腸右半切除術、低位前方切除術、肝切除(外側区域以外の区域)(肝移植術を含む)、膵頭十二指腸切除術、急性汎発性腹膜炎手術においては、ACS-NSQIPの入力フォームの日本語版を基本とし、術前、術中、術後の情報が含まれ110項目を設定しており、これらの術

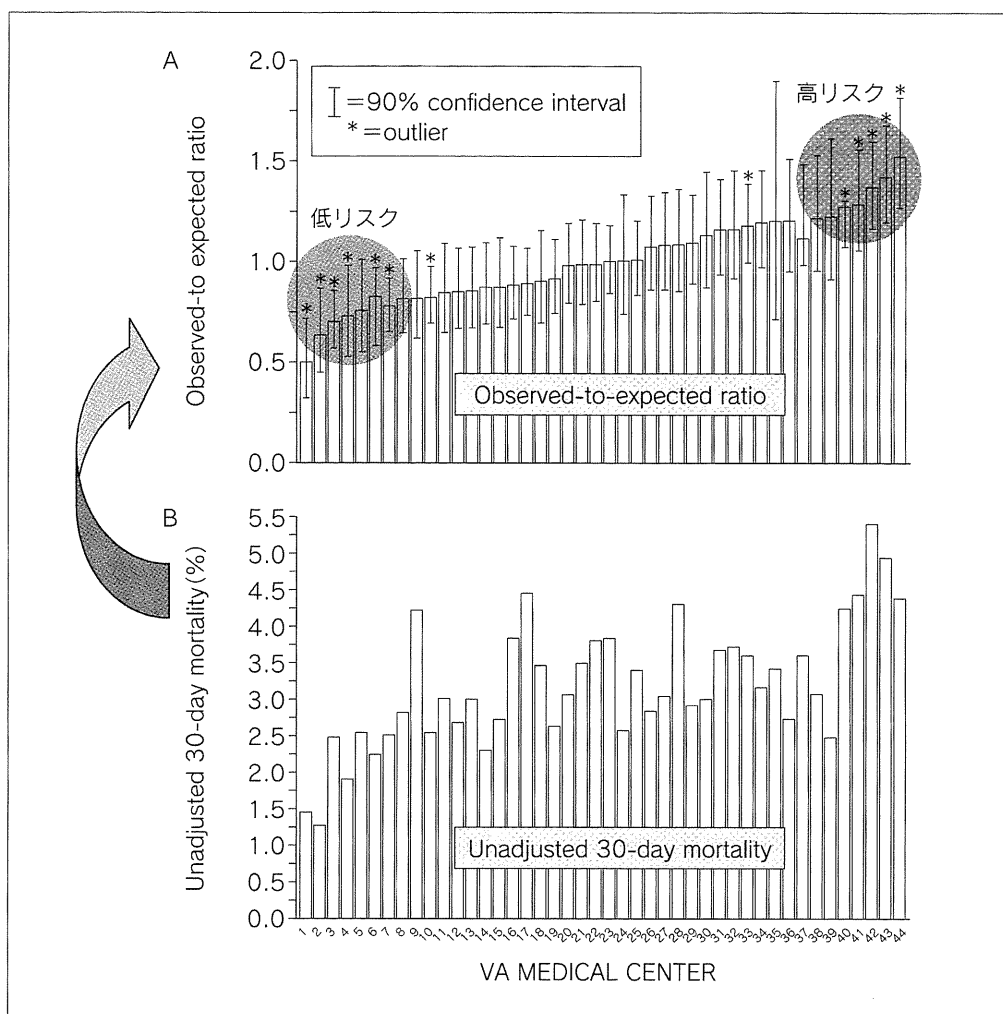


図2 リスク調整による術後の死亡率の比較

リスク調整していない場合（下段）は死亡率はばらばらであるが、調整すると施設間の比較が可能となり、低リスクの施設、高リスクの施設が見えてくる。ただし、施設名は明らかにされない。

(Khuri SF, et al, 文献7より引用)

式においては、死亡率とともに合併症の発生についてもリスク調整した評価が可能となる。

NCDに入力されたデータの利用と今後の展開

2011年の症例は100万例を超えると予想されるが、これらのデータの質の検証を行った後、種々の観点から、データ解析とデータの利用が始まる（表1）。また、医療の質を評価できる指標が明らかになるとともに、RASOを評価した全国データが明らかになる。同時に各診療科の立ち位置が、各診療科のみに伝えられる。あくまで個別の通知であり、個人、各施設のデータは公開されない。また、これらの入力データを利用した外科専門医、消化器外科専門医申請が本年度よりス

タートする⁸⁾。このことに関しては、各論の消化器外科全般で、今野弘之先生より詳細が示されている。

これまで大学を含む多くの修練施設では、臓器別のがん登録も行われていると思う。がん診療拠点病院では、診療情報管理士により、これほど詳細ではないが、癌に関する患者情報が入力されている。また、都道府県では地域がん登録が行われている。治療された患者の予後は地域がん登録で評価可能である。院内がん登録では、どのような進行度の人か、どのような治療を受けたかにとどまる。両者において、実施されている医療の質は全く見えないので、どこを改善すべきか、どのような目標を定めるかの評価ができない。医療の質を向上させることを第一の目標にするNCDの消化器外科関連の入力システムを軸に、他のがん登録をリンクあるいは一元化させることにより、入力負担を軽

表 1 NCD の今後の展開

- ・リスク補正をした手術成績 (risk-adjusted surgical outcome : RASO) を診療科別に算出し、全国と対比した形で現場へのフィードバック
- ・学会を横断して専門医や指導医などの複数の資格申請にデータを活用
- ・客観的なデータから専門医の意義を評価
- ・様々な領域において NCD の入力システムと連動した臨床研究を行うことが可能 (臓器別のがん登録のシステムも NCD に実装可能)
- ・客観的なデータから医療環境や診療報酬 (術式名は外保連に準拠) などに関する政策提言
- ・ACS-NSQIP との協力連携, TNM 分類の活用などにより, 消化器外科診療の国際比較

減し, 総合的, 多面的な医療の質の評価が可能になる。

治療の選択肢は手術のみならず, 内視鏡による治療, 放射線治療, 化学療法などが含まれる。どのような状況でどの選択肢が最も適当かを明らかにするためには, これらを網羅したデータベースが必要となる。NCD は, national surgical database とはせず, あえて national clinical database と命名した。これは外科のデータベースの基盤が整った段階で, ほかの基本学会の参入を歓迎することを基本概念としたためである。すでに乳癌学会では手術のみならず, ほかの治療法の登録も可能となっている。さらに多くの学会の参入を可能にするには, 新たなデータベースシステムの導入も考慮すべきで, 方法論的には, 電子カルテの基本構造の統一化ののち, 必要な情報を抜き出すシステムや, データベースのクラウド化なども将来の選択肢となるかと思われる。いうまでもなく, 個人情報の管理をどのように進めるかが課題として挙げられる。

最後に, このデータベース構築は, 医療の質の向上が第一の目的である。臨床現場の主導による領域別の医療水準評価や, 一般市民に対してより良質な医療を提供するうえで有用な情報を臨床現場にフィードバックすることが可能となる。また, 実証的データに基づいた専門医の適正配置の検討, 臨床現場の労働環境の改善, 適正な診療報酬の設定などによる, 医療提供体制の改善提案が可能となる。さらに迅速かつ精度の高い臨床研究 (投薬, 手技, デバイスの評価, リスク分析など) の実施の支援を通じた医療の発展へ寄与できるものと考ええる。臨床研究プロジェクトの立ち上げにあたって, このデータベースを使用すれば, 迅速かつ安価にシステム構築および参加施設のネットワーク形成を行うことができる。現場で働く医師をはじめとした臨床スタッフが疲弊してしまえば, 質の高い医療を継続的に提供することは難しくなる。したがって, 医療提供者が充実した質の高いケアを提供できる環境

を整備することや, 質の高い医療を提供する施設が, その質を適正に評価され, それに対して正当な社会的支援がなされることを提言していくことも必要である。これらのデータ利用を可能にするためには, 正確な医療情報の入力前提となることはいまでもない。プライドをもてる医療を提供していくため, 関係者の方々のいっそうのご尽力をお願いしたい。

文献

- 1) 日本消化器外科学会消化器外科データベース委員会 2007 年度調査報告 http://www.jsgs.or.jp/modules/oshirase/index.php?content_id=55
- 2) 日本消化器外科学会消化器外科データベース委員会 2008 年度調査報告 http://www.jsgs.or.jp/modules/oshirase/index.php?content_id=164
- 3) 日本消化器外科学会データベース委員会 2009 年度調査報告 http://www.jsgs.or.jp/modules/oshirase/index.php?content_id=212
- 4) Suzuki H, Gotoh M, Sugihara K, et al : Nationwide survey and establishment of a clinical database for gastrointestinal surgery in Japan : targeting integration of a cancer registration system and improving the outcome of cancer treatment. *Cancer Sci* **102** : 226-230. 2011
- 5) Birkmeyer JD, Siewers AE, Finlayson EV, et al : Hospital volume and surgical mortality in the United States. *N Engl J Med* **346** : 1128-1137. 2002
- 6) 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 がん臨床研究事業 採択のお知らせ http://www.jsgs.or.jp/modules/oshirase/index.php?content_id=158
- 7) Khuri SF, Daley J, Henderson W, et al : Risk adjustment of the postoperative mortality rate for the comparative assessment of the quality of surgical care : results of the National Veterans Affairs Surgical Risk Study. *J Am Coll Surg* **185** : 315-327. 1997
- 8) 日本消化器外科学会・専門医制度・その他専門医制度に関するお知らせ・消化器外科専門医制度がわかります。 http://www.jsgs.or.jp/modules/senmon/index.php?content_id=93

GOTOH Mitsukazu, et al
 福島県立医科大学医学部臓器再生外科学
 〒960-1295 福島県福島市光が丘 1

NCD への取り組み 心臓血管外科

Cardiovascular surgery

東京大学医学部心臓外科

本村 昇

【ポイント】

- ◆ 医療の質向上を目的に開始された日本心臓血管外科手術データベース (JCVSD) が成長し、専門医制度にリンクした NCD として発展した。
- ◆ JCVSD ではすでにリスクモデルが完成し、JapanSCORE (リスク計算式)、施設別サマリーといった機能が備わっている。
- ◆ JCVSD の機能を損なうことなく NCD や専門医制度とリンクしていくことが重要である。

臨外 67(6) : 780~783, 2012

はじめに

心臓血管外科分野では、NCD 発足のきっかけとなった日本心臓血管外科手術データベース (Japan Cardiovascular Surgery Database : JCVSD) が 2000 年から始まり、2004 年からは web-based でデータ入力を開始した¹⁾。2008 年にはリスクモデル、リスク計算式 (JapanSCORE) も公表され、日本の臨床現場の最前線で数多く利用されている^{2,3)}。現在では 450 以上の施設が参加する、わが国でも最も整備された全国データベースに成長した。本稿では、JCVSD の運用状況と NCD との連携、さらには専門医制度との連携を述べることとする。

日本心臓血管外科手術データベース (JCVSD) の運用状況

日本心臓血管外科手術データベースは成人部門 (日本成人心臓血管外科手術データベース : JACVSD) と先天性部門 (日本先天性心臓血管外科手術データベース : JCCVSD) から成る。JACVSD は 456 施設、JCCVSD は 107 施設が参加し、ほぼ全国の施設をカバーしている。成人部門でいうと入力項目は、基礎情

報、術前リスク、術中情報、術後合併症、生死情報など 300 項目以上あり、定義を含めて北米の STS National Database と同等にしている。参加施設にデータマネージャーを置き、JCVSD 事務局からログイン ID とパスワードを発行し、JCVSD ホームページ (図 1, <http://www.jacvsd.umin.jp/index.html>) からデータ入力画面に入り、データ入力を行う。入力データは自施設分に限りダウンロード可能であり、症例数、死亡率、合併症発生率といったクオリティコントロールにとって重要な情報をネットを通じて瞬時に見ることができる (図 2, 3)。さらに、蓄積されたデータの解析よりリスクモデルを作製し、これより得られた手術リスク計算式を JapanSCORE として提供している。これは日本での成績に基づいているため、欧州で開発された EuroSCORE よりも日本の現状に即している⁴⁾。この計算式は手術前のインフォームド・コンセント取得の際に患者およびその家族に提示したり、循環器内科とのディスカッションでも広く利用され、quality improvement に貢献している。

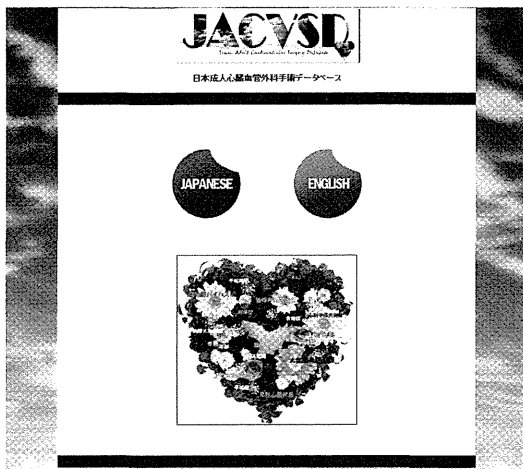


図1 日本心臓血管外科手術データベース（成人部門）の入力画面

項目名	Mean	(SD)
平均年齢	62.6	15.5
項目名	N	(%)
男性患者	590	68.1
女性患者	276	31.9
以前の心臓手術の既往	181	20.9
主要合併症	198	22.9
30-Day Mortality	17	2.0
30-Day Operative Mortality	39	4.5
30-Day Operative Mortality or 主要合併症	203	23.4

図2 施設別サマリー：基本情報

CABG only 総数: 264		
予測発生率(施設平均)	予測発生率(施設平均)(%)	
30-Day Mortality	1.99	
30-Day Operative Mortality	3.66	
30-Day Operative Mortality or 主要合併症	15.88	
リスク調整リスクステールの参照	OR比	リスク調整率(%)
30-Day Mortality	0.19	0.38
30-Day Operative Mortality	0.31	0.84
30-Day Operative Mortality or 主要合併症	1.0	13.6

図3 施設別サマリー：単独 CABG

心臓血管外科分野における NCD 運用の現況

JCVSD の成功を受け、このシステムを外科学会全体に应用する構想が持ち上がり、NCD が構築された。消化器外科学会をはじめ、参加学会は NCD に組み込まれたが、JCVSD はすでに確立・運営されていたため、現時点ではまだ独自運用となっている。入力サイト、入力プログラムは NCD とは別のものを利用し、データマネージャーの ID とパスワードも別である。したがって運営費用も別であり、独自の資金を用いている。入力データも NCD とは別のサーバーに置いているが、その場所は NCD 同様 UMIN 管理下に置いている。プログラムが NCD とは別であるため、現時点では入力項目や入力方式の変更などは JCVSD 独自で可能であり flexible である。

外科学会が管轄する外科専門医への申請が 2011 年の症例からは NCD からのみとすることが決定したため、外科専門医申請項目を JCVSD の最初のページに

用意した(図4)。このページの情報を使用することにより外科専門医申請は完了する。現時点では JCVSD と NCD ではデータの保管場所が異なるため、この JCVSD 第1ページ情報は年1回まとめて NCD に送られる。2011年のデータは2012年3月にデータ移行を行った。この移行データは、NCD ホームページから各人が検索・確認可能となっている。

NCD 参加学会は NCD 基本項目を土台にして、その上に各領域の詳細なデータベースプログラムを構築している。心臓血管外科以外は NCD 発足を契機に開発されたため、NCD がプログラム作成を手がけており、現時点では各領域内での入力項目の変更といったプログラム修正が自由にはできない状態となっている。心臓血管外科も NCD に融合することが決定しているが、この入力プログラム修正の flexibility が損なわれてはならない。NCD 共通としての土台を占めるプログラムと、その上に乗っかる各領域のプログラムはいくつかの NCD 公認 vendor が参入でき、各領域の責任と資金の下に、この NCD 公認 vendor を用いてのプログラ

NCD

UMIN ID:n-motomura / Hospital Name:〇〇大学 心臓胸部外科 / Hospital ID: / Language:Japanese

共通基本入力項目 :入力必須項目(準必須含) :入力必須でない項目

同意書はとりましたでしょうか	<input checked="" type="radio"/> Yes <input type="radio"/> Not yet <input type="radio"/> Reject (Rejectの場合は、年間完了報告の際、事務局に件数を報告する)
院内管理コード(患者ID)	<input type="text"/> ※ 1回の入院で手術を2回施術する場合、2回目の登録時IDの後に「-2」をつけてください (同一の患者さんであっても「入院日」が異なる場合は必要ありません)
患者の生年月日	/ 11 / 1 (yyyy/mm/dd) (※個人情報保護のため、日付入力が許可されていない場合は、日付(dd)が「1」を登録してください)
患者の性別	<input checked="" type="radio"/> 男性 <input type="radio"/> 女性
入院年月日(転科日ではなく入院日)	/ 1 / 16 (yyyy/mm/dd)
救急車搬送の有無	<input checked="" type="radio"/> No <input type="radio"/> Yes
患者住所の郵便番号	* 7桁 / フリガナで入力 参考: 東京 <input type="checkbox"/> 郵便番号国外・特定不能
入院時 第1診断 <input type="button" value="ICD10から選択"/>	大分類: 第IV章 循環器系の疾患 中分類: I20 狭心症 小分類: I20.0 不安定狭心症
入院時 第2診断 <input type="button" value="ICD10から選択"/>	未選択
手術年月日	/ 2 / 3 (yyyy/mm/dd)
緊急手術	<input checked="" type="radio"/> Elective <input type="radio"/> Urgent <input type="radio"/> Emergent <input type="radio"/> Salvage
第1術式 <input type="button" value="NCD心臓関連術式から選択"/>	試案No. 2557 冠動脈、大動脈バイパス移植術(人工心臓を使用しないもの) 2.2の場合以上のもの
第2術式 <input type="button" value="NCD心臓関連術式から選択"/>	未選択
術者 術者登録の画面を開く(登録後画面が利用できず更新してください)	<input type="text"/> 医師登録番号(Family name / First name) ※ 選択する術者がいない場合は、術者登録の画面から術者の追加を行ってください。
第1助手	<input type="text"/> 医師登録番号(Family name / First name) <input type="checkbox"/> 第1助手なし
第2助手	<input type="text"/> 医師登録番号(Family name / First name)
第3助手	<input type="text"/> 医師登録番号(Family name / First name)
第4助手	<input type="text"/> None <input type="text"/> 医師登録番号(Family name / First name)
指導的助手(責任者)	<input type="text"/> None <input type="text"/> 医師登録番号(Family name / First name)
麻酔科医の関与	<input checked="" type="radio"/> No <input type="radio"/> Yes
術後診断 <input type="button" value="ICD10から選択"/>	大分類: 第IV章 循環器系の疾患 中分類: I20 狭心症 小分類: I20.0 不安定狭心症

図 4 NCD 関連入力項目

ム開発が可能となるシステムが必要となろう (図 5)。現在、NCD の vendor と JCVSD の vendor が討議を重ね、この2階建てシステムを構築すべく努力している。

専門医制度との兼ね合い

外科専門医申請に関しては、JCVSD 第1ページ情報を移行することによりすでに対応可能であるが、心臓血管外科専門医に関しては2013年1月1日以降はJCVSD データを利用することが決定した。これに伴いJCVSD への参加が急増し、全国のほぼすべての施

設が参加することとなる。心臓血管外科専門医申請では手術難易度に従って A, B, C 三段階の点数を付けている (表 1)。データベース利用申請を契機に第2助手以降にも点数を与えるなど、申請要項の変更作業を進めている。また、手術記録の表紙コピー (個人情報を削除したもの) を提出させていたが、これがデータベース利用により省略され、申請者側だけでなく審査・事務局側の双方にとって大いなる労力削減になるであろう。特に、JCVSD では施設サイトビジットによる入力データ信頼性の向上にも努めており、専門医認定という重要な作業を補助することに耐えうる high

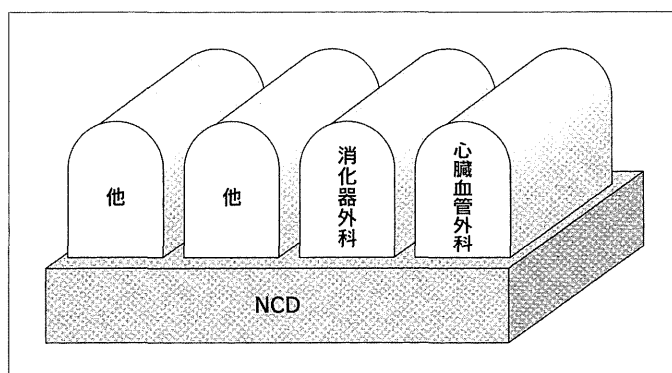


図5 NCDと参加学会の入カプログラム2階建て構造

表1 心臓血管外科専門医申請、手術難易度別点数

手術	A	B	C
術者	3	4	5
第1助手	1.5	2	2.5

qualityなデータベースであると自負している。

将来展望

NCDとJCVSDを通じて、わが国の心臓血管外科手術情報が網羅されると国民全体の福祉向上に大きく貢献することができ、JCVSD発足当初の目的を完遂することができる。この情報をより豊かなものとするために、術後遠隔期のフォローアップ情報など様々なデータ収集が必要となるであろう。また、データベースの膨大化が臨床最前線の若手外科医の負担とならぬよう、医療情報入力補助人員の整備といった周辺環境の整備がこれからの急務の課題である。外科医の周辺環境改善を獲得するためにも、このデータベース情報

を有効利用することが求められるよう。

文献

- 1) 本村 昇, 高本真一: 心臓血管外科手術におけるデータベース構築とIT. 胸部外科 55: 991-997, 2002
- 2) Motomura N, Miyata H, Tsukihara H, et al: First report on 30-day and operative mortality in risk model of isolated coronary artery bypass grafting in japan. Ann Thorac Surg 86: 1866-1872, 2008
- 3) Motomura N, Miyata H, Tsukihara H, et al: Risk model of thoracic aortic surgery in 4707 cases from a nationwide single-race population through a web-based data entry system: the first report of 30-day and 30-day operative outcome risk models for thoracic aortic surgery. Circulation 118: S153-159, 2008
- 4) Kurazumi H, Mikamo A, Fukamitsu G, et al: Validation of the japanscore versus the logistic euroscore for predicting operative mortality of cardiovascular surgery in yamaguchi university hospital. Gen Thorac Cardiovasc Surg 59: 599-604, 2011

MOTOMURA Noboru

東京大学医学部心臓外科

〒113-8655 東京都文京区本郷 7-3-1

MEDICAL BOOK INFORMATION

医学書院

今日の治療指針 2012年版

私はこう治療している

編集 山口 徹・北原光夫・福井次矢

デスク判 ●B5 頁2064 2012年
定価19,950円(本体19,000円+税5%)
[ISBN978-4-260-01412-0]

ポケット判 ●B6 頁2064 2012年
定価15,750円(本体15,000円+税5%)
[ISBN978-4-260-01413-7]

臨床医が日常遭遇する疾患とその治療法を、1110項目にわたって第一線のエキスパートが書き下ろした、わが国のゴールド・スタンダード。薬物療法については随所に処方例(商品名)を掲載。処方例は『治療薬マニュアル2012』の別冊付録「重要薬手帳」と連携している。新しい疾患概念や学会のトピックなど、領域ごとの流れがわかる「最近の動向」、コラム「服薬指導・薬剤情報」、多彩な付録など、診療に役立つ情報も満載。



外科医療の施策に NCDの活用を



岩中 督

©いわなか ただし
東京大学大学院医学系研究科小児外科教授/
National Clinical Database 運営委員長

1978年東大卒。埼玉県立小児医療センターを経て2006年より東大院教授。日本外科学会理事、外科系学会社会保険委員会連合会長補佐・手術委員長などを務める。

外科医の不足や地域偏在、それに伴う職場環境の劣悪化などにより、外科医療体制は危機に陥りつつある。この現状で患者に最善の医療を提供していくには、科学的根拠に基づいた施策の提言を行うことが不可欠である。

そもそも、本当に外科医は足りないのか。また、各領域の専門医は適正に配置されているのか、個々の医療施設や地域の医療水準は維持されているのか。これらの疑問に答えるため、外科関連専門医制度委員会の主導の下、日本外科学会とそのサブスペシャリティの9学会が共同して、2010年4月に一般社団法人National Clinical Database(NCD)を立ち上げた。手術症例を中心とした臨床データ

ベースの構築がその主な事業である。

このデータベースは、各学会が運営する専門医制度と密接に連携し、専門医制度の申請・更新に必要な手術実績のデータを提供する。さらに、各領域の医療水準の評価や様々な臨床研究の支援も行える構造とした。症例登録に必要な各領域の様々な入力フォーマットの開発を進め、日本外科学会と各サブスペシャリティ学会間の会員情報のすり合わせなどの作業を行った後、2011年1月の症例から登録が始まった。登録期間の前半はオンライン入力に伴うトラブルも多く、会員諸氏に多大なご迷惑をおかけしたが、後半からは順調な運営が可能となった。入力が殺到する締切直前の年度末においても、毎週5~7万件近いデータ入力に当システムは耐え抜いた。

本年4月の2011年症例締切時点で約3400施設(約5000診療科)が登録に参加し、130万件以上の手術症例が登録された。開始当初の予想を大きく上回る成果であり、この原稿執筆中の6月時点では、日本外科学会、日本消化器外科学会、日本小児外科学会に専門医制度に関わるデータを出力し、さらにサイトビジットを行って各領域のデータの正確性を検証し始めているところである。

これらのデータは、リスク調整された患者術前情報などを含んでいるため、様々な疾患について各施設の医療水準の評価が可能となっている。また、地域における病院の棲み分けや集約などの将来予測も可能とする。これらの分析結果を年内には関係する領域にお返しするべく、現在関係学会と意見交換中である。同時に、行政に対して外科医療体制の再構築、外科保険診療の適正なあり方などの提言を行うことも可能であり、外科系学会社会保険委員会連合(外保連)など関連組織と今後データの利活用について検討していく予定である。本誌面をお借りして、御協力いただいた外科医諸氏に御礼を申し上げたい。

SL-3

特別講演 3

The Role of National Clinical Database

National Clinical Database が目指すもの

岩中 督

東京大学大学院医学系研究科 小児外科

外科医が減少しつつあるという危機感の中で、外科系の専門医が適正に配置され、適切な手術を行っているか、という疑問に答えるため、日本外科学会と関連する subspecialty の9学会は、外科手術の全数把握を行うばかりか、各領域の医療水準評価をも可能にするデータベースである National Clinical Database を立ち上げた。2011年1月より手術症例の登録を開始し、初年度であるにもかかわらず120万件以上の外科医情報を含んだ手術情報が集積された。本抄録を作成中の6月下旬時点では、分析項目ならびに結果の公表について調整をしているところである。このデータベースは、外科医療全体の把握を目的とした13項目の業務統計部分を1階に持ち、各専門領域の要望に添った医療水準評価などに用いられる2階部分と、各種臨床研究に使用される3階部分とで構成されている。結果的には、約5000近い診療科の参加が得られ、地域における専門医の適正配置や外科医の偏在などが検証できる。またリスクアジャストされたデータが入力されている術式では、アウトカムを評価することで施設・医師の医療水準評価が可能となる。同時に専門医の関わりによる結果の違いも検討でき、各術式における専門医の必要性の評価も可能となる。これらのデータの利活用を各領域学会と現在検討中であり、その詳細を報告する。



岩中 督 Tadashi Iwanaka

学歴・職歴

昭和53年3月	東京大学医学部医学科卒業	平成6年4月～平成6年9月	
昭和53年6月	東京大学医学部付属病院外科系 研修医		文部省高等教育局医学教育課専 門員併任
昭和54年12月	静岡県藤枝市立志太総合病院外科	平成6年10月～平成9年3月	
昭和56年9月	東京大学医学部付属病院小児外 科（病院医員）		米国小児がん学会研究員併任 シンシナティ小児医療センター に研究のため留学（Visiting Scientist）
昭和58年12月	国立小児病院外科（厚生技官）		
昭和62年4月	東京大学医学部付属病院小児外 科（文部教官助手）	平成19年4月～ 平成22年6月～	埼玉県立小児医療センター相談役 東京大学大学院医学系研究科医 療品質評価学講座教授併任
平成9年4月	埼玉県立小児医療センター外科 科長	平成23年4月～	東京大学医学部附属病院副院長 兼任 （企画・経営、人事・労務、医療 安全担当）
平成18年8月1日～	東京大学大学院医学系研究科生 殖・発達・加齢医学専攻小児医 学講座小児外科学・小児腫瘍学 分野教授		

現在に至る

PS 2 - 2 臨床研究の方法を学ぶ

4. 大規模手術症例データベースとその利活用



岩中 督¹, 宮田 裕章², 大久保 豪²,
友滝 愛²

1 東京大学小児外科
2 東京大学医療品質評価学講座

日本外科学会ならびにその関連学会で構成される外科関連専門医制度委員会は、外科系専門医制度とリンクする手術症例データベースを構築するため、2010年4月に一般社団法人 National Clinical Database を立ち上げた。外科専門医ならびに subspecialty 領域の専門医を申請・更新したい学会員は、本データベースに登録された症例のみが手術実績として採用されるため、手術のたびに基本的な手術情報を入力せねばならない。一方でこのデータベースは、個々の領域の臨床研究に必要な risk-adjust された患者診療情報やアウトカムなどを2階建て部分に包含しているため、施設や医師の医療水準評価を可能とした。既に心臓血管外科領域ではより高位の臨床情報を組み合わせ、新たな医療技術の開拓などの臨床研究を実施中である。専門医の適正配置、病院機能の棲み分けなど、行政への提言も可能とするこのデータベースの構造とその利活用について述べる。

略 歴

- 1978年 東京大学医学部医学科卒業
- 1978年 東京大学医学部附属病院外科系研修医
- 1979年 静岡県藤枝市立志太総合病院外科
- 1981年 東京大学医学部附属病院小児外科 (病院医員)
- 1983年 国立小児病院外科 (厚生技官)
- 1987年 東京大学医学部附属病院小児外科 (文部教官助手)
- 1997年 埼玉県立小児医療センター外科科長
- 2006年 東京大学大学院医学系研究科小児外科学教授
- 2011年 東京大学医学部附属病院副院長兼任 現在に至る。

主な所属学会等

日本小児外科学会指導医, 日本外科学会指導医, 日本小児外科学会副会長, 日本外科学会理事, 日本内視鏡外科学会理事, 日本小児救急医学会理事外科系学会社会保険委員会連合会長補佐・手術委員長, 一般社団法人 National Clinical Database 理事, 運営委員長, 国際小児内視鏡外科学会理事・副会長

プレナリーセッション (5月12日) (土)

手術症例DBの階層構造

